

谷を渡る水

御坂の谷は幅が七三五メートルもあり、ここに鉄管を使って水を渡すのです。

淡河川の水は、水路を通過して御坂の谷の北側まで運ばれてきます。

ここの高さは、※ひょうこう標高約

百三十二メートルです。御坂の南側は約百三十メートルで、北側より約二メートル低いために、北側から一度谷底に下り、そこから再び南側へはい上がるように鉄管を渡すと、水は噴水のようにわき上がるのです。

※標高…海水面からの土地の高さ



川の上に鉄管を渡すために、石づくりのじょうぶな「めがね橋」もつくりました。

淡河川おうごがわから水路を引く工事は、苦勞の連続でした。スコップやツル※ハシなどを使って進める作業ですが、途中とちゆうの岩山はもろくてすぐに崩れ、雨が降ればぬかるみ、晴ればひび割れ、質しつの悪い土からは、水が浸み出しました。また二十八か所にトンネルがつくられましたが、掘るたびに崩れてしまうので、急いで松の木の丸太を組んで支えなければなりませんでした。なかでも、御坂みさかの南側にある芥け

※ツルハシ：固い土を掘り起こす道具で、掘る部分がツルのくちばしのように細長い



子山しやまトンネル（六百八十二メートル）は大変危険きけんな所で、一日に六十センチメートルしか掘ほれない時もありました。

しかし、外国の進んだ技術ぎじゆつと、汗あせと泥どろにまみれて働いた人々のおかげで、水路はついに、分水所※ぶんすいじよがつくられた練部屋ねりべやという所までつながったのです。ここでは、それぞれの村が求めた水の量におう応じて、正確せいかくに分ける工夫がなされました。

こうしてついに、工事の開始から三年四か月もかかり、明治二十四年（一八九一）、長さ二十キロメートルの淡河川おうごがわ疏水そすいが完成しました。

山田川やまだがわ疏水そすいも

淡河川おうごがわ疏水そすいができたことにより、新しく七百九ヘクタールの土地が水田に

※分水所：届いた水の流れをいくつかの方向へ公平に分ける施設

変わり、全部で千百十二ヘクタールもの土地をうるおすことができました。水の恵みを受けて、米も多くとれるようになりました。

やがて、淡河川疏水だけでは水が足りなくなり始めました。また、三木や明石・神戸の岩岡地域からも、新しい疏水をつくってほしいという声があるようになりました。

そこで、山田川から水を引いてきて、淡河川疏水と合わせて使おう、ということになったのです。

今度は銀行からお金を借り、明治四十四年（一九一〇）から工事を始め、その水を受けるために、なんと六十あまりもの新しいため池をつくりあげたのです。全ての工事が完成したのは、大正八年（一九一九）でした。

この山田川疏水によって、新しく八百四十八ヘクタールの荒れ地や畑にも水が届くようになり、見事な水田に変わりました。